異文化間のミスコミュニケーションとポライトネスモデル

井 上 逸 兵

1. はじめに

本論においてはポライトネスのいくつかの代表的なモデルを批判的評価を加えながら略述し，異文化間語用論および異文化間コミュニケーションの観点から，異文化間のミスコミュニケーションの分析に資するポライトネスモデルのあり方について考察したい。

「ポライトネス（politeness)」とは部分的には「丁寧さ」に対応する概念だが，本論では「ポライトネス」という語を主に用いることにする。その方が「丁寧さ」より広い概念を指していると考えられるからである。一般的に「丁寧さ」とは相手に対する敬意や尊敬，あるいはそれを示す表現形式と結びつけて考えられ，日本の言語文化の風土においては欧米のこの種の研究で問題にされるような友好関係や連帯（solidarity）を生み，維持し，高めるという営みとは一線を引かれているように思われる。したがって，本論で「ポライトネス」あるいは「ポライト（polite)」という時，「丁寧さ」を含んだより包括的な概念を指すことにする。しかしながら，その「ポライトネス」の定義については，これまでの研究において実は共通したものはないといってよく，またここでもおこなわない。定義そのものがこれから述べるいくつかのモデルのそれぞれにとってきわめて重要な部分を構成していると考えられ，ポライトネスをいかにとらえるかということ自体が問題なのであり，ここで簡潔な定義を試みたとしてもそれは一般的な意味でのポライトネス，丁寧さとさほど大きな差はないと考えられるからである。

ただ，共通して言えることはポライトであるということを単なる表現形式の問題と考えてはいないということである。言語形式との関わりを概観するために，本題に入る前にコミュニケーションと言語という大枠においてポライトネスについて考えておこう。それはまた言語におけるポライトネスの位置づけと限界を見極めておくことでもある。ポライトネスは広義の言語学の中で論じられることが一般的であるが，その中では周辺領域にあると言ってよい。これは「自律性（autonomy)」を本質とする，すなわち単純に言うと基本的に言語のみを（Chomsky 流では文のみを）分析の対象とする言語学の本道からすれば，あまりに雑多な要素が入り込みすぎているからである。日本語学，国語学における敬語研究は必ずしも周辺的とはいえないが，それは多くの場合文法体系に組み込まれたものとしての敬語を対象としてきたからであって，その意味では敬語研究はこの「自律性」を本質とする言語学の流れにあるともいえる[1]。社会的インデックスとして主に代名詞の問題を取り扱った研究[2]やJespersen（1965）やQuirk *et al.*（1985）などの伝統文法の中でポライトネスの問題らしきものに言及される箇所があるが[3]，欧米での本格的なポライトネス研究はAustin（1962），Searle（1969）らの発話行為論（speech act theory)，Grice（1975）の会話の原理の登場を

待たねばならなかった。すなわち，言語のみを自律的に扱うことを不十分とし（あるいは不満とし），会話の参与者，意図，コンテクストなどとの関わりおいて言語現象を解明しようと試みる語用論以降のことである。

コミュニケーション活動全体の中で考えると，ポライトネス現象は言語によるものに限られないことは言うまでもない。人が通行するために道をあけてやることや贈り物を捧げるといった非言語的行動ももちろんそこには含まれるが，Watzlawick *et al*.（1967）が「コミュニケーションをしないことはできない（we cannot *not* communicate）」というように非意図的なメッセージのやりとりを含めて考えればコミュニケーションにおける言語の占める比率はきわめて低いともいえる。そのような消極的な意味でも，また研究の歴史的な経緯から言っても本論が問題にするポライトネス研究はとりあえず言語学の流れにある。しかし，言語学史的にいえばポライトネス研究は例えばChomskyが「人間の言語使用の主な目的をコミュニケーションと考えるのは誤りである[4]」とすら言う自律的言語学からの脱却という側面を持っており，コミュニケーションへの言語学からの一つの重要なアプローチともいえる。それは言語とはいかなるものかということだけではなく，我々人間は言語によって何を，どのように行っているかという問題の解明への試みなのである。

2. ポライトネスモデル

本節ではポライトネスに関する代表的な研究としてR. Lakoff，Leech，Brown & Levinson（以下，B＆Lとする）のモデル，そして会話の契約あるいは適切性という観点からのモデルを略述してみよう。前者二つはかなり明確にGriceの会話の原理の延長線上にあり，B＆Lは「面目（face）」という概念を用いたモデルである。いずれも言語運用面では社会文化的な差があることを認めてはいるが，これらのモデルの普遍的有効性を主張する。最後のモデルはコミュニケーションの民族誌（ethnography of communication）や相互作用分析へと統合されるべきものとして後述することになる。そしてこの節の最後で異文化間コミュニケーションにおけるこれらのモデルの効用について考えてみたい。現在の言語研究におけるポライトネスの議論は主にGriceの会話の原理（およびそれを補完する形でLeechが発展させたポライトネスの原理），Austin，Searleらの発話行為，そしてB＆Lのモデルを批判する形で展開されることが多いが，その批判の多くはモデルの普遍性に向けられ，様々な言語文化の反証を提示する形でなされている。すなわちLeechのことばで言えば社会語用論（sociopragmatics），あるいは本論でも取り上げる異文化間語用論（cross-cultural pragmatics）といわれるような方向に進んでいるわけだが[5]，その引用度，批判の対象とされる頻度からいってもこれらのモデルは現在のポライトネス研究の中心にあるといえよう。

ポライトネス研究の概観はFraser（1990）によって得られるが，それによれば，ポライトネスへのアプローチには，ｉ）社会的マナーあるいはルールという見方[6]，ii）会話の格率的見方，iii）面目の保持的見方，iv）会話の契約的見方の大きく4つのがある。本論では主にii），iii），iv）を議論の対象とすることにしよう[7]。R. LakoffとLeechはii）にあり，B＆Lはむろんiii）に含まれる。

2.1 R. Lakoff のポライトネス研究

R. Lakoff は最初に Grice の原理を発展させた形でポライトネスを論じようとした研究者の一人である。彼女のポライトネスに関わると見なしうるいくつかの研究は純粋にポライトネスそのものに対する関心に根ざしたものというより，当時の生成意味論的な試みとして見るのが妥当であろう。Lakoff（1975）における性差研究の先駆けとなる著作においても反変形生成文法的態度が明確に打ち出されている。そのせいか彼女の一連の研究の相互の関わりはことポライトネスに関する限り必ずしも明確ではない。ここでは Lakoff（1972）と Lakoff（1973）の例を見てみることにする。Lakoff（1972）では女主人が来客に対して，自らが作ったか，少なくとも自らが選んだケーキをすすめるという状況では，(1) You must have some of this cake. (2) You should have some of this cake. (3) You may have some of this cake.のうち(1)が最も丁寧であるのは日本語などの謙譲表現と同様の機能が働いているからだという。つまり，この状況では，'must'は強制しなければ食べないかもしれない，そのケーキを食べることはおそらくそのケーキがおいしそうではないために聞き手がしたがることではない，ということを含意し，それによって彼女の焼いたケーキを低める（謙遜する）働きをしているわけである[8]。それに対して'should'は助言を与えていることになるので，'must'にあるような強制力がないだけ謙譲の効力がなくなる。'may'は許可を与えていることになるので，話し手の方が許可を与える権限をもつ，すなわち上位者であるということを含意するのでこの中では最も無礼となるというわけである。

一方，Lakoff（1973）では(a) Be Clear，(b) Be polite という原理が提示されている。(a)は基本的にはグライスの公準で，それを補完する形で提示されたポライトネスの原理(b)には次のような下位規則がある。

Rule 1：Don't impose（押しつけるな）
Rule 2：Give options（選択を与えよ）
Rule 3：Make A Feel Good（友愛の情を示せ）

大ざっぱに言えば，おそらく後述するB＆Lのモデルでは Rule 1と2は同じ消極的なポライトネス（negative politeness）の範疇に統合されるであろう。必ずしも明確な論述はないが，Lakoff がそれらを区分している基準は状況や対話者間の社会的距離などの要素のようである。Rule 1は形式的で，非個人的なポライトネスが要求される場合，Rule 2は非形式的な状況，Rule 3は親密な間柄に当てはまるという。しかし，単純に考えると Rule 1を実現させるための手段として Rule 2を用いたり，Rule 2が Rule 1を含意することなどを考えれば，この区分をもうけるにはあまり積極的な理由は見あたらない。さらに Lakoff が言うようにこれらの規則を状況的なものと結びつけるなら，あまりにコンテクストを定的なものとしてとらえすぎるという難点がある。実際の会話の相互作用においては話者は戦略的に様々な方策を用いうるのであり，必ずしもコンテクストは決定的な要因にはならないからである。

この二つの研究の結びつきはあまりはっきりとは感じられない。しかし，共通して言えることは彼女がコンテクストという要素を文法理論に取り込む必要性を強く意識し，それを試みていることである。そのような生成意味論的な試みは後にその限界に遭遇したとしても，

後のポライトネス研究と特にR. Lakoffについて言えば，一般社会をもまきこんだ性差研究および性差に関する議論への足がかりとして評価されるべきであろう。

2.2　G. Leechのモデル

Leech（1983）は相補主義者（complementarist）的な観点，すなわち形式的な言語の体系と相補的な関係に語用論を位置づけ，コミュニケーションを問題解決の過程と考える。これは語用論に対して修辞的な（コミュニケーションにおける言語の効果的な使用という意味で）アプローチをとることを意味し，発話を目的的行為ととらえる。発話の目的には会話の参与者の発語内的（illocutionary)目的と社会的目的の二つの側面があり，彼の言う修辞はそれに対応してHalliday流の対人関係的修辞（Interpersonal rhetoric）とテキスト形成的修辞（Textual rhetoric）から全体の構成がなる。ポライトネスの原理はこの前者に含まれるが，ここでもある意味では上とパラレルな相補的な立場をとる。すなわち，ポライトネスその他の原理によって補完させることでGriceの原理の有効性を保つことができると考えているわけである[9]。Griceのいう協調の原理（Cooperative Principle，以下ＣＰ）が字義的ではないメッセージの解釈を可能にし，ポライトネスの原理（Politeness Principle，以下ＰＰ）はそこからの逸脱，そしてその動機付け，理由の説明を可能にするとされる。LeechのＰＰは「他の条件が等しければ，聞き手にとって好ましくない信念の表明を最小限にせよ。同時に聞き手にとって好ましい信念の表明を最大限にせよ。」というもので，GriceのＣＰとその格率（maxims）と同様，ＰＰにおいても次のような格率によって下位区分されている。

(i)　TACT MAXIM（気配りの格率）
　(a) Minimize cost to *other*[10]　[(b) Maximize benefit to *other*]
(ii)　GENEROSITY MAXIM（寛大さの格率）
　(a) Minimize benefit to *self*　[(b) Maximize cost to *self*]
(iii)　APPROBATION MAXIM（是認の格率）
　(a) Minimize dispraise of *other*　[(b) Maximize praise of *other*]
(iv)　MODESTY MAXIM（謙遜の格率）
　(a) Minimize praise of *self*　[(b) Maximize dispraise of *self*]
(v)　AGREEMENT MAXIM（同意の格率）
　(a) Minimize disagreement between *self* and *other*
　[(b) Maximize agreement between *self* and *other*]
(vi)　SYMPATHY MAXIM（共感の格率）
　(a) Minimize antipathy between *self* and *other*
　[(b) Maximize sympathy between *self* and *other*]

(i)と(ii)，そして(iii)と(iv)はそれぞれ両極を持つ尺度のもとに一対をなし，(v)と(vi)はそれぞれ単極の尺度をもつ。例えば，'You can lend me your car.'が丁寧に感じられず，それに対して'I can lend my car.'は丁寧に感じられるのは気配りおよび寛大さの格率が，'Please

accept this small gift as a token of our esteem.'は丁寧であるのに対して，'Please accept this large gift as a token of our esteem.'が丁寧に感じられないのは謙遜の格率が，それぞれ適用されるからである。

彼のモデルではそれぞれの格率が一群の尺度を持っていて，ある発話の状況において上の格率がどの程度要求されるかを決定する際にそれを参照しなくてはならないとされる。負担—利益，選択性，間接性，権威，社会的な距離などの尺度があるが，ここでは彼が英語圏の社会でおそらく最も重要な種類のポライトネスと考えている気配りの格率の場合を取り上げてみよう。

ここでは詳述を避けるが，Leechの議論はSearleらの発語内的機能との関係づけが基礎となっている。気配りの原則はSearleの行為指示型（directive）[11]と行為拘束型（commissive）[12]の範疇の発語内的行為に適用されが，この行為は話し手または聞き手にとって負担または利益となると話し手が仮定するものによって評価される。これをもとにある発語内的行為の命題内容は以下のように負担-利益の尺度の上に位置づけられる。（*h* は聞き手）

	cost to *h*	less polite
(1) Peel these potatoes	↑	↑
(2) Hand me the newspaper.		
(3) Sit down.		
(4) Look at that.		
(5) Enjoy your holiday.		
(6) Have another sandwich.	↓	↓
	benefit to *h*	more polite

コンテクストにもよるが，この尺度のある不確定な点から問題の値は「聞き手にとって負担」から「聞き手にとって利益」に変化する。すなわち，文法的な形式が同じ範疇にあるとされるものでも負担か利益かによってポライトネスの度合いが異なってくるわけである。また，間接性の尺度もポライトネスをはかる一つの方法である。

	indirectness	less polite
(7) Answer the phone.	↓	↓
(8) I want you to answer the phone.		
(9) Will you answer the phone?		
(10) Can you answer the phone?		
(11) Would you mind answering the phone?		
(12) Could you possibly answer the phone?		
		more polite

同じ命題内容でもより間接的な発語内的行為を用いることによってポライトネスの度合いを

高めることになる。なぜなら，間接的な発語内的行為は選択性（optionality）の度合いを増加させ，発語の効力が弱められあやふやなものになるからである。

Leech のモデルはこのように情報伝達については Grice のＣＰを，そして社会的な目的でのそれに対する緩衝剤としてＰＰを説明原理として，コミュニケーション活動を分析しようとしている。そしてＰＰの運用は下位区分された格率といくつかの尺度との相関によってなされるというかなり緻密な構成を持っている。しかし，様々な原理や格率がややアドホックに積み重ねられている印象は拭いきれず，無限に増殖させていかねばならない可能性を秘めているように思われる。また，彼自身が例としてあげている A: Your performance was outstanding! B: Yes, wasn't it!という対話のＢの発話は謙遜の格率と衝突するために丁寧ではないと考えられるが，これは同意の格率には抵触しない。賛辞を受けたときに（日本なら謙遜の格率が優先するであろうが）謝辞とともにそれを受け入れることは彼の言語文化的背景にあるはずのアングロサクソンの文化においてすらも不自然ではないはずである。Leech は社会語用論の名の下にそれぞれの格率が適用される場合の社会文化的な差異を比較的意識はしているが（それについては後述する），どのような状況でどの尺度や格率が適用されるかについての一般化はほとんどなされていない。また，発語内的機能があまりにも強くポライトネスと結びつけられすぎるきらいがある。例えば，競合型（competitive，命令など）は本質的に無礼（discourteous）であるというが，そうでないコンテクストの例はいくらでも挙げることができるだろう。例えば英語では，部屋に明らかに入りたがっている人には'You may come in.'よりも'Come in.'の方がはるかにポライトである。これはある意味では言語の形式性を重んじる相補主義の歪みともいえるもので，言語形式のみによってポライトネスを分析するアプローチの限界とも言えるかもしれない[13]。

2.3 Brown と Levinson のモデル

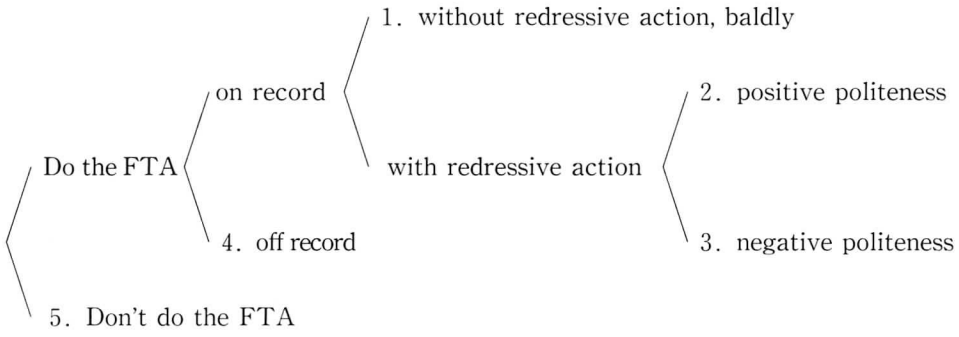
Ｂ＆Ｌ（1978，1987）のモデルは現在のところこの分野では最もよく知られたものであり，ポライトネスへのアプローチとして最も有力なものの一つと考えられているといってよかろう。後に取り上げる Wierzbicka（1985，1991），Matsumoto（1988）などのような批判も少なくないが，そのような議論がこのモデルをめぐって展開しいることからもその影響力の大きさうかがい知ることができよう。

彼らのモデルは会話および会話者の合理性をという観点から言うと基本的には Grice と同じ前提にある。そしてその前提からの逸脱の原理をポライトネスに求めるという点では Leech に等しい。しかし，Leech が Grice の会話の原理に補完的な関係の原理として（彼流のレトリックとして）ポライトネスをとらえているのに対して，Ｂ＆Ｌのモデルでは言語的なポライトネスそのものが「メッセージ」として伝達されねばならない（Grice のいう会話の含意として）という立場に立つ。「恐れ入りますが，窓を閉めていただけませんでしょうか」という発話は依頼，要請という発語内効力だけではなく，話者のポライトであろうとする意図をも伝達しているのである。そして，このモデルの最も特徴的なことは Goffman（1967）から得た「面目（face）」という概念を用い[14]，それを一つの欲求とし，それを満たし脅かす行為という枠組みでポライトネスを扱っている点である。

すべてのモデル上の人物（Model Person）は公的な自己のイメージである面目を持ち，

それは文化的により精緻化されるが，基本的には普遍的な概念であるとする。面目には二つの側面があり，一つは消極的な面目（negative face，以下ＮＦとする），もう一つは積極的な面目（positive face，以下ＰＦ）である。簡潔に言えば，前者は押しつけられたくない，自由を阻害されたくないという欲求で，後者は他者によく思われたい，友好的に思われたいという欲求である[15]。発話は潜在的にそれらの面目を脅かす行為（Face Threatening Acts，ＦＴＡ）という側面を持っており，その例として次のようなものがあげられている。すなわち，(i)聞き手のＮＦを脅かす行為：命令，忠告，強迫など，(ii)聞き手のＰＦを脅かす行為：不平，非難，反論など，(iii)話し手のＮＦを脅かす行為：申し出の受け入れ，謝辞の受け入れ，気のすすまない約束など，(iv)話し手のＰＦを脅かす行為：謝罪，ほめことばの受け入れ[16]，告白などである。

さらにとりうるＦＴＡの類型として次のように図式化している。



この図式では面目を失う（失わせる）危険性が低いほど上の（数字の小さい）方のストラテジーを選択し，逆にその危険性が高いほど下の（数字の大きい）方を選択するとされる。この枝分かれの順序で見ていくと，まず状況の判断によってＦＴＡを行使するかどうかを決断する[17]。ＦＴＡを行使すると決定するなら，さらに on record か off record かのストラテジーを選択する。前者は「記録に残る形で」という意味だが，ここでは「一義的に解釈される」と考えてよい。一方後者は一義的に解釈されないということ，すなわち発語内効力（illocutionary force）をそれとして解釈されない可能性のある言い方をするということになろう。「お金を貸してください」は依頼，要請などとして一義的にしか解釈されないが，「誰か金貸してくれる人いないかなあ。」や「お金を貸してくれる人を探してるんですけどね。」においては聞き手はそれを少なくとも自分への依頼として解釈する必要はなく無視することができる。また，その際相手が「すみません。今あまり持ち合わせがないんですよ。」と依頼として解釈したとしても「いいえあなたに借りようと思ったわけではないんです。」と話し手自身が発語内効力を否定することができる。つまり，その方が逃げ道を持っている分だけ面目への脅威は低いと考えられるわけである。on record のストラテジーを用いる場合，修正的行為（redressive action）をそれに加えるかどうかの選択をおこなう。最も面目を失う（失わせる）危険性が少ない場合（例えば，緊急を要したり，力関係が明白である場合）は修正的行為なしで，すなわちあからさまに（baldly）にＦＴＡを行使すると考えられる。生

命の危険が迫っていれば見知らぬ人に「助けて！」と言っても無礼とは考えられにくいし，強盗がその被害者に丁寧なことばを用いることもあまりないだろう。修正を加える場合，面目のどの面を強調するかで二つの形態をとる（ＰＦかＮＦか）。これらについてＢ＆Ｌは英語以外の言語を含めたかなり多くのストラテジーの例をあげて詳述しているが，ここでは英語からの簡単な例にとどめておこう。ＰＦに対するポライトネスストラテジー（positive politeness strategy，以下ＰＰＳ）は主に連帯（solidarity），非形式性（informality），親しさ（familiarity）の表明という形をとる。例としては，聞き手に関心を払いながらＦＴＡを行使するというストラテジー（"Goodness, you cut your hair！(...) By the way, I came to borrow some flour."）や話し手と聞き手が共通の土台にいることを前提とするストラテジー（[医者が患者に] "Now, have *we* taken *our* medicine?"）などがあげられよう。一方，ＮＦに向けられるポライトネスストラテジー（negative politeness strategy，以下ＮＰＳ）は差し控え（restraint），形式性（formality），距離（distance）の表明という形をとる。慣習的な間接表現を用いること（"Can you please pass the salt?"）や押しつけを弱める言い方（"I *just* want to ask you if I can borrow *a tiny bit of* paper）などが例としてあげられる。

それに加えて，Ｂ＆Ｌのモデルではストラテジーの選択の際に必要とされるポライトネスの程度を，三つの独立した，文化的に左右されやすい変数によってＦＴＡの大きさを算定することによって決定するとされる。すなわち，(i)話し手と聞き手の社会的な距離（social distance，Ｄ），(ii)話し手の聞き手に対する相対的な権力（relative power，Ｐ），(iii)その文化における押しつけのランク（ranking of imposition，Ｒ）の三要素である。ＦＴＡの重さ（Wx）は次のような式によって計算される。

$$Wx = D(S, H) + P(H, S) + Rx$$

この計算式に与えられる数値が実質的な意味をもつかどうかはとりあえずはおいておくとして，ここでいわんとすることは個々の変数の値が等しくなくともＷの値が等しければ同様のポライトネスストラテジーを用いるということである。つまりＤが大きくＰが小さい（例えば，見ず知らずの道ですれ違った人同士）場合，Ｄが小さくＰが大きい（例えば同じ部署の上司と部下）場合，Ｄ，Ｐがともに小さく（例えば恋人同士）Ｒが大きい場合に同じストラテジーが用いられる際の説明を可能にするのである。

異文化間語用論の観点からのＢ＆Ｌ批判は後述するとして，ここでこのモデルそのものの問題をいくつか指摘しておこう。まず第一に Meier（1995）も指摘するように，原理的には面目という概念は話し手聞き手双方に適用されるはずのものであるが，いつの間にか彼らの議論は聞き手の面目のみが問題となり，話し手が議論から消えていってしまう。例えば，謝罪（apology）はＢ＆ＬのモデルではＮＰＳとして数えられるが，Holmes（1990）の指摘にあるように，謝罪によって話し手は自身のＰＦを保持するという側面もある。面目の取引においては実際には話し手聞き手の相互作用が様々に関与してくるにもかかわらず，全般的に聞き手の面目のみが議論の中心となっている。また，ＮＦとＰＦの区別が必ずしも明確ではないという問題もある。極端な例をあげれば，人に話しかけるという行為は交話的（phatic）な意味で相手のＰＦを満たすものであるが，反面自分との会話に引き込むという

意味では相手の自由を奪う行為，すなわち相手のＮＦをおびやかすことになってしまう（誰でも話しかけられたくない時に話しかけられて鬱陶しく思うことがあるだろう）。沈黙を保つこともその裏返しで同じことが言える（注(17)参照）。また，依頼（request）はＢ＆Ｌの枠組みでは聞き手のＮＦへの脅威と考えられるが，かえって話者間の連帯（solidarity）を高めるというコンテクストも十分考えられる[18]。後述する異文化間コミュニケーションにおいてはこのＮＦとＰＦのバランスが最も大きな問題の一つとなるのである。さらに，ＦＴＡの重さ（W*x*）を算定する式における社会的距離（D），権力差（P），押しつけのランク（R）はポライトネスの決定要素にはならないという指摘もいくつかある。例えばBaxter（1984）によれば，関係が親密である方が（Dの値が低い方が）よりポライトネスの度合いが高いという場合も考えられるのである。

その他異文化間語用論の観点から，このモデルはＢ＆Ｌが主張するほどには普遍性はないとする批判が多くある。しかし，百歩譲ってこれがアングロサクソン的モデルだとしても，彼らのモデルはこれまででもっとも説得力のある体系をもっており，その簡潔さから最も参照しやすいモデルであり，最も細部まで検討されたモデルと言ってもおそらく過言ではないだろう。言い方をかえれば，ポライトネス研究ではＢ＆Ｌモデルの批判はあってもそれを乗り越える包括的かつ実証に根ざしたモデルは今のところ提示されていないのである。その意味でも，自律的言語学から社会学的な方向性を示したという意味でも，またその後に続くポライトネス研究を活性化させた意味でも彼らの功績はかなり大きなものといわざるをえない。

2.4　会話の契約モデルあるいは適切性モデル

最後にFraser（*Ibid.*）などに見られるポライトネスを会話の契約（Conversational Contract，以下ＣＣ）ととらえる新たな展開と思われるモデルを概観し，類似のアプローチをとるMeier（*Ibid.*）の修復作業（Repair Work）にもふれてみたい。FraserのモデルではGriceのＣＰを基本的なレベルでは採用し，Goffmanの面目の概念の重要性も認めているが，いくつかの重要な点でＢ＆Ｌのモデルと異なっている。それは会話の参与者が義務と権利の一種の契約関係をもって会話を営んでいるという点である。そして会話の参与者は初期の段階では基本的に無標の契約関係にあり，会話がすすむにつれてこの初期の契約関係を常に再交渉していく可能性を持っているという。会話の相互作用を行う参与者がこの契約関係を確立する次元は，ほとんど交渉不可能な一般的なもの（会話の順番（turns）をとったり，理解可能な言語を使用したり，聞き手が聞き取れる大きさの声で話したりすることなどが期待されるレベル）から，社会的な制度が要求していると思われるもの（法廷での証人は質問を受けたときのみ話さねばならないことなど），前回の出会いや状況によって決定されるものまで様々である。最後に挙げた次元での会話では契約事項は参与者の地位，権力，役割などの要素によって再交渉されていく。この観点から言えば，ポライトネスはつねに進行状態にある（on-going）プロセスであり，社会的に期待され，要求された行動の規範である。会話の参与者は一般的にこの規範の範囲内で行動することが要求されていることを意識しており，ポライトであるということはLakoff流に聞き手を快くさせることでも，Leech流に本質的に不快である発話に補完的な方法を用いることでも，Ｂ＆Ｌ流に面目の脅かしを弱めることでもなく，この社会的に同意された好ましい行為のコードに合致させることなのである。

つまり，ポライトであることが標準なのであり，この契約に違反したときにはじめてポライトではないと認識されるのである。B＆Lがいうようにポライトであるという意図はそれ自体メッセージとして伝達されるわけでも，GriceのＣＰの表面的な違反によって含意されるわけでもなく，ポライトであることはＣＰを遵守し，かつＣＣを遵守している証明としてうけとめられる。この観点から言えばB＆Lのとりあげている現象のほとんどは意図された敬意（intended deference）として扱われることになるだろう。

Meierの修復作業に対する提案はFraserとはややことなった枠組みであるが，ポライトネスをその社会における適切性（appropriateness）ととらえる点で共通している。修復作業とは行為者（actor）とあるグループによって期待された基準を下回った行為との責任の連接（responsibility link）のもとに，行為者のイメージが被った被害を補修するという機能を果たす。被害を被ったイメージは話し手と聞き手の世界の分岐をもたらすが，修復作業のストラテジーはイメージの修復とともにこの分岐した世界の収束を促進する。修復作業は相互作用的な会話であり，社会的な関係の確立と維持を目的とする[19]。つまり修復作業とは話し手が「よい人（good guy）」であり，社会的な規範に合致した適切な行動をとっていることを示そうとする試みである。このような修復作業的なアプローチでは（Leechのように）ある種の発話行為や（B＆Lのように）ある種のストラテジーにポライトネスの地位を結びつけることを前提とせず，ある状況において適切であると知覚されることが何であるかを同定しようとする。

このようにポライトネスを標準あるいは適切性ととらえることはある意味では一般の話者の直観にあうところがあるかもしれない。しかし，ポライトであることが標準であるというならば，なぜある表現があるものよりも丁寧だと言えるのか。同じ状況でいずれも適切とされる表現群のうち，戦略的にあるものを選択する動機付けはいかに説明しうるのか。これらのモデルは少なくとも後述する異文化間コミュニケーションのためのモデルの一部として考えるならば経験的な事例研究の積み重ねがない限りこの時点ではほとんど無益に等しい。異文化のポライトネスモデルを理解しようとする者にとって何が標準なのか，何が適切なのかということは何も教えてくれないのである。しかし，それが満たされれば逆に異文化間のミスコミュニケーションの分析に最も適合性の高いモデルとなるが，それについては後述することにしよう。

2.5　異文化間コミュニケーションにおけるポライトネスモデルの効用

アメリカなどで活発に議論され，一つの学問分野として確立した感のあるいわゆる異文化間コミュニケーション論においては本論でとりあげているような言語的なポライトネスを特定的に論じることはあまりない。それは冒頭でも述べたコミュニケーションにおける言語の比重の低さということもあるが，前提となる視点が全く異なっていることが起因しているといえる。筆者の見解では異文化間コミュニケーションとは学問分野というよりは，そこに様々なアプローチがなされるひとつの対象であると思われるが，異文化間コミュニケーション論者には第二言語習得，社会学，社会心理学，文化人類学，文化論的なアプローチをとるものとならんで（あるいは，と同時に），アメリカで発達した一般意味論（general semantics）[20]的な前提が根底にある場合が多いように思う。それは医学にとって病気より

は健康の方がよいのと同様にコミュニケーションに対する，誤解より理解が好ましいといういわば「人道的」な見地である。それはSamovar et al.（1988）などのアメリカでよく読まれるテキストにもよく現れている。一方基本的に言語学の一分野とされるポライトネス研究はそのような「人道的な」立場から，いかにポライトである（べき）かを論じているのではない。B＆Lでいう「モデル上の人物（Model Person）」もそのような模範的な人物を意味するのではなく，面目に対する欲求に必ず何らかの配慮をするはずであるという意味での合理的な（rational）な人間として仮定され，それによってモデル化が可能になっているのである。我々は時に意図的にポライトではなく振る舞うが，当然ながらポライトネス研究はこれを妨げようとはしない。このような見解の相違はそのまま一部のコミュニケーション研究と言語学にもあてはまるが，ことポライトネス研究に限ってはいわゆる異文化間コミュニケーション論との多くの接点を持っているように思う。異文化間コミュニケーションでしばしば問題にされる文化的価値や対人的な知覚などはポライトネスモデルの重要な要素になってくるはずだからである。特に後述する相互作用的な視点を取り入れていくならばこれらの分野との共同作業は必須のものとなっていくだろう。

さてポライトネスモデルが異文化間コミュニケーション[21]にどのような効力をもつかを特にB＆Lをもとにしてここで少し考えてみたい。対話者の背景的知識の乏しい初期の接触においては，ポライトネスモデルがあまり有効に効力を発するということはないかもしれない。東洋人対西洋人の場合のように外見的な手がかりがあることもあるが，対話者がどの文化に根ざしたコミュニケーションスタイルをもっているかは初期の段階では必ずしも明示的ではないし，B＆Lでいう積極的なポライトネスを好むか消極的なものを好むかについても当然ながら個人差がある。また，対話者がコミュニケーションの文化的な差異についてどの程度の予備知識があるかについてはほとんど絶望的に予測不可能である。アングロサクソンの文化にある話者（A）と日本人の話者（J）との英語による対話を考えてみよう。仮に使用言語が英語であることで日本人話者は積極的なポライトネスが優勢であるようなストラテジーをとったとする。現実的にはこの場合問題が起こらないことが多いだろうが，もしAが東洋人はNPSを多用するであろうという予測をし，言語はかわっても会話のスタイルは変わりにくいというような信念をもっているとするなら，Jをポライトではないと感じるかもしれない。また積極的なポライトネスが優勢である文化においてもあらゆる状況でそうであるとは限らないし，B＆Lのモデルでいう積極的／消極的のバランスの見極めは大きな困難の一つとなりうる。これはB＆Lモデルの問題点の一つであったが，この両者は表裏一体の関係にあるので行きすぎたPPSはNFへの脅かしとなり，また逆にNPSの行きすぎは距離を大きくしすぎてPFへの脅かしとなってしまう。

しかし，ポライトネスモデルはある手がかりを得たとき，全般的な言語行動においてある程度一貫した体系を予想させてくれる。例えば，アメリカ人にファーストネームで呼ばれたとすれば，こちらもファーストネームで呼び返すことを期待されているかもしれないと予想できるだけでなく，他の局面においてもPPSを用いることが許されることをある程度予想させてくれる。また，非言語行動に関しても言語行動と同様の理解を与えてくれるかもしれない。アメリカ人の家庭にホームステイしている日本人学生がその家の人にある誘いをなぜ一度しかしてくれなかったか（その日本人は二三度誘われれば応じようと思っていたかもし

れないが)，昭和天皇がアメリカの農場を訪れた時農場主が天皇の肩に手を回して案内したのはなぜなのか（多くの日本人はそのアメリカ人が「なれなれしく」天皇を見下していると思ったかもしれないが)[22]などの理解の一助にポライトネスモデルはなりうるであろう。ただし，このような参照に耐えうるものになるためには真に普遍的なモデルの構築とその社会的変数となる事例研究が積み重ねられて行かねばならない。残念ながら現時点ではいずれのモデルもその条件を備えてはいない。次節においては普遍性と社会文化的差異の両面における研究の進展を促す異文化間語用論の事例をいくつかみてみよう。

3. 異文化間語用論とポライトネス

本節ではポライトネスの言語文化的な差異を前節までで概観したモデルを参照しつつ考察してみたい。モデルの一般化を求める一方でポライトネスを含めた社会文化ごとの語用論的な差異を問題とする一群の研究を異文化間語用論（cross-cultural pragmatics）と総称することにしておこう。このような議論の多くはGriceの会話の原理，Ｂ＆Ｌの枠組み，発話行為（speech act）理論への反証という形で提示されるが，その趣旨はこれらの原理が普遍性をうたいながらその実きわめて欧米的あるいはアングロサクソン的偏見によるものであるということを非欧米，非アングロサクソンからの事例をもとに主張するというものである。このような論争自体はある意味で当然のことで，理論的な整合性とともに簡素でエレガントな理論を求める傾向があるのは言語理論の本質でもあるし，また，数土（1995）が指摘するようにそもそもモデルとは現実不適合的な側面を持っていることを考えると，このような批判の中には対象とするモデルに決定的な打撃を与えないものもある。しかしながら，意識的か否かは別として，現実にはこれらの批判はいくつかの語用論的な原理を異文化間の様々な差異をはかる，結果的には尺度として多くの知見を与えてくれていることに疑いはない。このような語用論的運用の異文化間の差異に着目した異文化間語用論[23]は特に異文化間のミスコミュニケーションのありうる原因をさぐる一つのアプローチとしてきわめて有効なものであるといえよう。

まず，Wierzbicka（1985，1991）の事例を見てみよう。彼女はポーランド語の例を引きながら，間接的な表現が丁寧であるのはポーランド語には当てはまらず，逆に間接性がまさにアングロサクソン文化，英語の特徴だと主張する。例えば英語には一般的な'Would you like a beer?'という勧誘あるいは提供の表現をポーランド語で逐語訳すると'Miał/byś ochotę na piwo?'となるが，これはおそらく質問としか解釈されず，英語にあるような発語内的効力はもたない。すなわち，Leechの間接性の尺度も間接的であることがＮＰＳであるというＢ＆Ｌのモデルもここでは適合しないのである。ポーランド語では全般に英語に逐語訳するといわゆる押しつけがましい表現になるものが多く，英語で'Would you like to go to the cinema with me?'に相当する表現よりも'Perhaps we would go to the cinema?'に相当する表現の方が一般的であるという。前者はむしろ相手が「行きたい（would like to)」という前提を明白に表現してしまうので生意気な印象を与えてしまいかねないのである[24]。

Matsumoto（1988）ではGrice，Ｂ＆Ｌの面目の概念が適応されない例として日本語の事例を挙げている。Ｂ＆ＬのモデルにおけるＮＦは基本的に個人の領域を犯されたくないとい

う欲求からなっているが，日本人にとっての重要な関心事はむしろ集団における他者との関係，他者による受け入れということである。B＆Lは依頼は基本的に聞き手のNFを脅かす行為であるとするが，例えば日本語でしばしば用いられる「どうぞよろしくお願いします」は依頼であるにもかかわらずNFへの脅かしとは考えにくい。この類の形式的な表現は関係確認装置（relation-acknowledging devices）として機能しているのであり，上記の表現によって自分が相手に対して依存する関係にあることを表明することでその関係を良好なものにしようという意図のもとに使用されるのである。聞き手から見れば（それをたとえ否定しようとも）依存される対象として日本の社会的な関係の中では肯定的な立場に立つことになる。したがって上記の依頼はNFへの脅威ではなく，聞き手のPFの欲求を満たす表現となる[25]。

井出（1986），Ide（1989）もB＆L的な面目の概念が普遍的なモデルの基礎とはなり得ないことを対人認知も含めた実験的な手法を用いて論証し，より包括的なプログラムを提案している。ポライトネスに関わる言語使用の側面にはわきまえ（discernment）的な側面と働きかけ（volition）的な側面があり，アングロサクソン的なモデルは合理的目的的行為としての後者に偏りすぎているとしている。これによればB＆LのFTAの重み（W）を算定する式の有効性も疑問視せざるをえない。Wxの値が低くなってもわきまえ方式としての敬語を用いるか否かは働きかけ方式とは独立して考慮せねばならないからである。わきまえ方式に基づいて振る舞うということは社会的な慣習にしたがってある状況で立場や役割を理解していることを示すことであり，ポライトな振る舞いとはすなわち社会における自らの立場にとって適切な社会的な期待を自覚しているという反応なのである。

Gu（1990）も中国語に関するポライトネスにおいて私的な面目と公的な面目との区分をもうけることによって，個人よりも集団を強調した公的な面目に対する見方を提示し，B＆Lのモデルは中国語には適応できないことを指摘している。またNwoye（1992）はナイジェリアのイボ族（Igbo）においては個人の自己イメージよりも集団の自己イメージの方により大きな関心をもつことから，集団の面目と個人の面目の区別を提案し，B＆LよりもFraserのCC的な見方の方がイボ族の社会には適応させやすいと述べている。Schifferin（1984）はユダヤ系社会においては，社交的な議論で話者が相手に同意しないことが特徴的で，議論をすることが連帯の表示や親密さの確保といった機能を果たしている例を挙げている。これはLeechのいう同意の格率の違反が無礼だという含意をうまないということを意味する。

このような批判の多くが非欧米あるいは非アングロサクソン圏からなされていることはGrice，Austin，Searle，Leech，B＆Lらがすべて基本的にはアングロサクソンの文化的背景をもっていることを如実に物語っている。また，見方を変えれば自文化を客体化させることがいかに困難であるかもそこからうかがい知ることができる。これは異文化間コミュニケーションの最大の障害とされる自民族中心主義（ethnocentrism）の克服の困難さでもあるのである。その意味でもこのような事例研究をさらにすすめて行く必要があるが，視点をわが日本におくと東および東南アジアに関する事例が不足していることは憂うべきことであろう。「浮き世離れ」は言語学の伝統ではあるが，そのような現実的な視点もあってもよいはずである。

4. 異文化間のミスコミュニケーションのためのポライトネスモデル

このような異文化間語用論が異文化間のミスコミュニケーションの分析に有効であることは十分想像できるが，本節ではミスコミュニケーションそのものに少しふれ，最後に異文化間のミスコミュニケーションの分析のためのポライトネスモデルのあり方を考察してみたい。

Scollon & Scollon（*Ibid.*）はB＆Lモデルを用いて異文化間コミュニケーションを分析し，逸話的な事例を引きながら，会話の参与者の面目の算定が異なっていると権力の差として認識される傾向があることを指摘している。一方の話者がＰＰＳ（Scollon & Scollon でいう involvement のストラテジー）を用いる場合，その話者は連帯を促進するものと考え相手からも同様にＰＰＳを期待するか，階層的に自分が上であると考え，相手はＮＰＳ（Scollon & Scollon でいう independence）を用いることを期待する。前者の場合，相手がＮＰＳを用いると，その話者は相手が自らを低い位置に置き，話者は自分の方に権力が与えられるような印象を得るかもしれない。また一方の話者がＮＰＳを用いる場合，相互の敬意の表明を期待するなら相手からもＮＰＳを期待するが，もし相手がそれに対してＰＰＳを用いてくるなら，その相手は自分よりも上の立場に立とうという意図をもっているという印象を得るだろう。面目に関わる関係は初期の無標の前提という要素と相互作用の中で常に交渉を行っていく要素からなると考えられるが，会話の参与者がどの面目の体系を用いるかについての一致がないと，その交渉は権力（Ｐ）の次元でなされると感じるわけである。また同じくＢ＆Ｌの枠組みで英語の母語話者（アメリカ人）と非母語話者（ベネズエラ人）との英語による謝罪行動についてなされた Garcia（1989）の実験的調査によれば，アメリカ人の方がＮＰＳを用いることが多く，一方ベネズエラ人はＰＰＳを好むとされている。この際，聞き手であるアメリカ人はベネズエラ人のＰＰＳによる謝罪に不快感を示しているという。ここでも Scollon & Scollon が言うように連帯の表明が権力の表明と解釈された可能性があり，それが不快感につながったと観察している。

しかし，これまで見てきたようにＢ＆Ｌ的なモデルも Matsumoto（1989）が指摘しているように Grice（およびその延長線上にある Leech）以降のプログラムもその普遍性，そして異文化間比較の尺度としての有効性もきわめて疑わしいと考えざるを得ない。非欧米的文化圏におけるポライトネスについては特にそれが顕著である。上に挙げた Garcia はアメリカ人とベネズエラ人の会話のスタイルは前者がイギリス人に比べるとよりＰＰＳ的であることからこれらは連続体にあるとしているが，非欧米圏を含めたより広範囲の視野で見れば根本的に質的な違いがあることは明らかとなるはずである。本論で概観したものだけを見てもそれは明白である。

それに対して第２節で見たポライトネスモデルのうち最も精緻化されていないＣＣモデルおよび適切性の観点からみるモデルは異文化間のミスコミュニケーションの解明という観点から見ると逆に最も可能性を秘めたモデルといえる。第二言語習得に関する応用言語学的な研究はこの枠組みにあり，Blum-Kulka（1982），Eisenstein & Bodman（1986），Trosborg（1987）などは外国語の習得において，文法，語彙，音韻面などの言語能力（linguistic competence）が高度に獲得されている話者においてすらも社会的に適切とされるある種の

ルールが欠如しているために効果的なコミュニケーションが行えないことを実験的に例証している。これらの研究の基礎となっているのはHymes（1964，1962，1974）が導入したコミュニケーション能力（communicative competence）という概念であるが，まさにHymesのいうコミュニケーションの民族誌（ethnography of communication）的なプログラムの中にＣＣおよび適切性モデルを統合させることができるであろう。Chomsky流のある言語における可能なすべての文を産出する言語能力（あるいは文法的能力）だけではなく，どのような状況でどのようなことを言えるかまた言うべきかあるいはまた何を言わないことが期待されているかといったコミュニケーション能力の解明が必要なのである。その際これまでのいくつかのモデルで見たようにある種の表現形式，発話行為としての型，ストラテジーを機能としてアプリオリに決定するのではなく，あくまで「民族誌」的な記述をもとにしたアプローチが必要不可欠である。ことばの機能は言語文化によって異なっているばかりでなく，ことばそのものの役割が文化によって異なっているからである。現実にそのような作業が困難であることは，具体的な分析がHymes自身を含めてすすんでいないことを見れば明らかであるが，異文化間のミスコミュニケーションの主な源の一つと考えられるポライトネスに関するこれまでの知見を再統合することによって，少なくともポライトネス現象に関しては新たな視界が開けてくる可能性は大きいと考えられる。

またＣＣモデルのもう一つの特徴は会話を交渉，再交渉の過程と見ることであるが，異文化間コミュニケーションを視野におくとき，Gumperz（1982）などの相互作用分析は最も有効となるといえるかもしれない。彼はGarfinkel（1967）のエスノメソドロジー（ethnomethodology）的なプログラムのもとに，伝統的な言語学でいう文法的な側面，韻律的なパターン，非言語的手がかり，様々な社会言語的変数などの微視的な要素を会話の分析に取り込み，異文化間，および異民族間（interethnic）コミュニケーションにアプローチしている。従来の社会言語学的な現象を，様々な社会的なカテゴリーとアプリオリに同一化することなく，会話の参与者が会話における解釈を交渉していく相互作用的なプロセスとして分析を行う。この解釈は彼がコンテクスト化の手がかり（contextualization cues）と呼ぶ，メッセージ形式の表層的な特徴がいかに当該の活動と結びついているかを合図する要素に対する慣習化された共起の期待によって可能となるのだが，その単純な例として，イギリスの空港のカフェテリアで働くインド人とパキスタン人の女性が彼女らの韻律的なパターンがイギリス人の慣習からすると不機嫌で非協力的な解釈を与えたためのミスコミュニケーションを取り上げている。文法能力が十分でも，そのような慣習性との不一致が誤解を招き，そしてその原因はしばしば会話の両参与者にとっても明確には理解されないのである。コミュニケーションの民族誌はたしかにコンテクストによるその文化ごとの会話のルールを記述しようとし，言語と文化が個々に完結した別個の単位とする機能主義的なパラダイムを否定してはいるが，発話の出来事（speech event）を独立した変数からなる境界をもった単位としてとらえる傾向がある。しかし，Gumperzのプログラムではそのような集団ごとの境界がいかに決定され，集団のメンバーがどのように発話の出来事を同定し，相互作用の中で社会的な知識がメッセージの解釈にどのように影響を与えていくかの解明を目指しているのである。

ポライトネスへの取り組みは現時点では前述の通り，Grice的なコミュニケーション，すなわち会話者の合理的な推論の過程と意図の効果的な伝達という側面に目が注がれることが

多く，上に挙げたようなコミュニケーションの民族誌あるいは相互作用分析的な観点からの考察は少ないように思われる。少なくとも異文化間のミスコミュニケーションの分析を目標とするならば，この方面からのアプローチが待たれるところである。Grice， Leech，B＆Lに向けられる自民族中心主義，アングロサクソン中心主義というような批判も避けられるものになるはずである。

5. おわりに

本論ではポライトネスの欧米モデルを概観し，異文化間のミスコミュニケーションの分析のためにあるべき研究の方向性を考察してきた。異文化間語用論的事例研究の蓄積と文化における適切性と会話の相互作用への視点の転換の必要性にもふれてきた。普遍的モデルの構築と実際の異文化間コミュニケーションへの有効性という注文はきわめて厄介で，かつある意味では矛盾に満ちたものであり，よく言っても欲張りである。しかしそこに対象があるかぎり，それは問い続けて行かねばならない。おそらくそれによって言語研究に新たなパラダイムを切り開くことになろう。それは自律的言語学から見たたんなる非主流ではないはずである。

注

(1) 欧米の「自律的」言語学の流れについてはNewmeyer（1986）などを参照。なお，同様の問題を扱いながら「自律的」言語学に対するかなり批判的な見方として興味深いのは田中（1993）である。

(2) Brown & Gilman（1960）など。

(3) Fraser（1990）参照。

(4) Chomsky（1972）。

(5) Griceの原理はSperber & Wilson（1986）の関連性理論（relevance theory）に発展的に解消され，活発な議論が繰り広げられている。関連性理論は一般の認知との関わりにおいてコミュニケーションをとらえているので，社会文化的な差異を問題とする語用論においては議論の対象とされることはあまりない。

(6) Fraserは'social norm view'という表現を用いているが，iv）との混同を避けるためにその内容からこのように表現した。

(7) 本論ではふれないｉ）について簡単に言及しておこう。ｉ）は歴史的に見た一般大衆のポライトネスに対する理解のことで，エチケットマニュアル的な記述から得られたものである。これは言語学的なものではないが，要約すれば，一般的には形式的（formal）な度合いが高まれば，ポライトネスの度合いも高いという見方である。後述するB＆Lのいう積極的ポライトネスという発想はここにはない。

(8) R. Lakoffは日本語を念頭に置いて議論しているようだが，来客に食べ物をすすめるという状況は日本においても英米においても等価のものという前提に立っている。むろんこれは疑わしい前提である。

(9) その他の原理にはアイロニー，冷やかし，関心（「予測のつかない，そしてそれゆえ面白いことを言え」），ポリアンナ（会話における参与者は不快な話題よりも愉快な話題の方を好む，という

心理的な性質から得られる原理。この原理の消極的な側面は婉曲表現である。）の原理などがある。後にも述べるが，このように原理を増殖させていかねばならないところがLeechのモデルの欠点である。

(10) 正確には「他者への負担を表現するか含意する信念の表明を最小限にせよ」である。以下同じ。

(11) 聞き手の行為によって何らかの効果が生み出されるように意図されている発語内行為。命令，指揮，要請など。

(12) 話し手に何らかの未来の行為に対して責任を持たせる発語内的行為。約束，宣誓，提供など。

(13) Sperber & Wilson（*Ibid.*）のいう関連性理論の観点からのLeechの理論についての考察がJucker（1988）にある。関連性という観点から言えば，間接的であるほどポライトであるとは必ずしもいえない。間接的であるほど処理労力が高まるが，それが面目に対する配慮と理解されて初めてポライトと考えられる。

(14) ただし，Fraser（1990）も指摘するように，Goffmanと同じ意味でこの語を用いているかは疑わしい。

(15) NFを一般的な意味における「否定的」なものと誤解される可能性を考慮してScollon & Scollon（1995）は前者に'independence'，後者に'involvement'のポライトネスという用語を用いている。

(16) B&Lはほめられると，そのほめられた対象（すなわち自分の何か）を卑下しなければならない状況を想定しているようである。

(17) しかし，Scollon & Scollon（*Ibid.*）も指摘するように，コミュニケーション活動が行われていれば広義の面目に関わらないことはあり得ない。沈黙は相手のNFを保持する一つのストラテジーと見なし得るし，相手に話しかけるということ自体が交話的言語機能（phatic communion）的な意味でも相手のＰＦに対するストラテジーと考え得るからである。

(18) Widdowson（1984）参照。

(19) B&Lと大きく異なるのは話し手のイメージを中心とし，聞き手の面目に対する配慮は話し手の面目を保持しようとする試みの副産物と考えられていることである。

(20) Korzybski（1933），Hayakawa（1949）など参照。

(21) 実際には異人種間（interracial），異民族間（interethnic）などの下位範疇化が必要だが，ここではそれには立ち入らない。Samovar（Ibid.）などを参照のこと。「異文化間コミュニケーション」の「間」が同語反復的だとして「異文化コミュニケーション」という語も一般的になっているが，筆者には大差は感じられない。

(22) Sakamoto & Naotsuka（1982）参照。

(23) 中間言語語用論（interlanguage pragmatics）は中間言語，すなわち主に第二言語の使用の語用論的な側面の研究で，同じ意味で興味深いものであるが，本論では特定的には取り上げなかった。

(24) 人は意図的に無礼に振る舞うことができるが，ポーランド語ではその場合，英語の不定詞に当たる表現で行為指示型行為を行うという。その際の含意は相手を語りかけの対象として人間として扱っていないということで，非人間的，非個人的なストラテジーが最も無礼になると考えられる。ちなみにポーランド語やその他のスラブ系の言語では指小辞（diminutive）が発達しており，それによって相手に対する敬愛の念を表明することができる。二人称の代名詞にいわゆるＴ／Ｖの対立がないことを含めて，スラブ系の言語の話者から見ると英語は敬愛の念を表明しにくい言語と映るらしい。英語の親しさの表明は形式ばらないこと（informality）によるものであり，必ずしも敬愛の念を表しているのではない。ポーランド語では形式性と敬愛の表明は矛盾するものではなく，敬称（英語で言うMr/Mrs/Miss）をつけてファーストネームで呼ぶことは英語と違

ってごく自然であるという。

(25) また Matsumoto (1989) では同様の主張として，日本語では社会的対人関係的に無標の，中立的な表現はありえないとして，Grice，B&L の前提を批判している。

引用文献

Austin, J. L. 1962. *How to Do Things with Words.* Oxford Univ. Press. 坂本訳『言語と行為』大修館書店

Baxter, Leslie M. 1984. An investigation of compliance-gaining as politeness. *Human Communication Research* 10 (3): 427-456.

Blum-kulka, Shoshana, 1982. Learning to say what you mean in a second language: A study of the speech act performance in learners of Hebrew as a second language. *Applied Linguistics*, 3: 29-59.

Brown, Penelope & Stephen C. Levinson, 1978. Universals in language usage: politeness phenomena. In E. Goody, ed. *Questions and Politeness*. Cambridge University Press.

————. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Use*. Cambridge Univ. Press.

Brown, Roger & Albert Gilman. 1960. The pronouns of power and solidarity. In Thomas A. Sebeok (ed.). *Style in Language*. MIT Press, pp.253-276.

Chomsky, Noam. 1972. *Language and Mind*. Enlarged Edition. Harcourt Brace.

Eisenstein, Miriam & Jean W. Bodman. 1986. 'I very appreciate': Expressions of Gratitude by native and non-native speakers of American English. *Applied Linguistics*, 7 (2): 167-185.

Fraser, Bruce. 1990. Perspectives on Politeness. *Journal of Pragmatics*, 14: 219-236.

Garcia, Carmen. 1989. Apologizing in English: Politeness strategies used by native and non-native speakers. *Multilingua, 8* (1): *3-20.*

Garfinkel, Harold. *1967. Studies in Ethnomethodology*. Prentice-Hall.

Goffman, Erving. 1967. *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behavior*. Doubleday

Grice, Paul, 1975, Logic and Conversation. In Peter Cole & Jerry Morgan, eds. *Syntax and Semantics, Vol 3: Speech Acts*. Academic Press. pp. 41-58.
Steven Davis, 1991. *Pragmatics: A Reader*. Oxford Univ. Press.に再録

Gu, Yueguo. 1990. Politeness phenomena in modern Chinese. *Journal of Pragmatics*, 14: 237-257.

Gumperz, John J.(1982) *Discourse Strategies*. Cambridge UP.

Hayakawa, S. I. 1949. *Language in Thought and Action*. Harcourt, Brace & World.

Holmes, Janet. 1990. Apologies in New Zealand English. *Language in Society*, 19 (2): 155-199.

Hymes, Dell. 1964. Directions in (ethno) linguistic theory. *American Anthropologist*, G6.3, part 2: 6-56.

————. 1962. The ethnography of speaking. In T. Gladwin & W. C. Sturtevant (eds.). *Anthropology and Human Behavior*, pp. 13-53. Anthropological Society of Washington.

————. 19874. *Foundations in Sociolinguistics: An Ethnographic Approach.* Tavistock.
唐須教光訳『ことばの民族誌－社会言語学の基礎』紀伊国屋書店

Jespersen, Otto. 1965. *A Modern English Grammar : Part IV*. Allen & Unwin.

Jucker, Andreas H. 1988. The relevance of politeness. *Multilingua, 7* (4) *: 375-384.*

Korzybski, A. *1933. Science and Sanity : An Introduction to Non-Aristotelian Systems and General Semantics*. Science.

Lakoff, Robin. 1972. Language in context, *Language*, 48 (4) : 907-27.

————. 1973. The logic of politeness : or, minding your p's and q's. *Papers from the ninth regional meeting of the Chicago Linguistic Society*. pp. 292-305.

————. 1975. *Language and Women's Place*. Harper & Row.

Leech, Geoffery N. 1983. *Principles of Pragmatics*. Longman. 池上・河上訳『語用論』紀伊国屋書店

Matsumoto, Yoshiko. 1988. Reexamination of the universality of face : politeness phenomena in Japanese. *Journal of Pragmatics, 12 : 403-426.*

————. *1989. Politeness and conversational universals — observations from Japanese. Multilingua*, 8(2/3): 207-221.

Meier, A. J. 1995. Passages of politeness. *Journal of Pragmatics*, 24 : 381-392.

Newmeyer, Frederick J. 1986. *The Politics of Linguistics*. Univ. of Chicago Press. 馬場・仁科訳 ニューマイヤー『抗争する言語学』岩波書店

Nwoye, Onuigbo G. 1992. Linguistic politeness and socio-cultural variations of the notion of face. *Journal of Pragmatics*, 18 : 309-328.

Quirk, Randolph, *et al*., 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.

Sakamoto, Nancy & Reiko Naotsuka. 1982. *Polite Fictions : Why Japanese and Americans Seem Rude to Each Other*. 金星堂

Samovar, Larry A., R. E. Porter & N. C. Jain. 1981. *Understanding Intercultural Communication*. Wadsworth.

Schiffrin, Deborah. 1984. "Jewish argument as sociability" *Language in Society*, 13 : 311-355.

Scollon, Ron & Suzanne W. Scollon. 1995. *Intercultural Communication : A Discourse Approach*. Blackwell.

Searle, J. R. 1969. *Speech Acts : An Essay in the Philosophy of Language*. Cambridge Univ. Press.

Sperber, Dan & Letetia Wilson, 1986. *Relevance : Communication and Cognition*. Blackwell.

数土　直紀 1995.「現実不適合的なモデルの意味」『人文科学論集』(信州大学人文学部) 29：41-54.

田中　克彦 1993.『言語学とは何か』岩波新書

Trosborg, Anna. 1987. Apology strategies in natives/non-natives. *Journal of Pragmatics*, 11 : 147-167.

Watzlawick, Paul, Janet B. Bavelas & Don D. Jackson. 1967. *Pragmatics of Human Communication : A Study of Interactional Patterns, Pathologies, and Paradoxes*. W. W. Norton & Company.

Widdowson, Henry G. 1984. *Explorations in Applied Linguistics 2*. Oxford UP.

Wierzbicka, Anna. 1985. Different cultures, different languages, different speech acts : Polish vs. English. *Journal of Pragmatics*, 9 : 145-178.

————. 1991. *Cross-Cultural Pragmatics : The Semantics of Human Interaction*. Mouton de Gruyter.